

NIE全国大会実践報告資料

複数のメディア・ICTを活用したNIEの実践

作新学院小学部

渡辺 順



作新学院小学部



- 栃木県内唯一の私立小学校
- 一の沢キャンパス内に幼稚園・小学部・中等部・高等学校の各設置校
- 各学年3クラス, 児童数378名

発表内容

1. 作新学院小学部のN I Eの取り組みについて
2. 複数のメディア・ICTを活用したNIEの実践報告
3. 成果と課題

N I Eの取り組み ①NIEコーナー



N I Eコーナーに新聞が届く → 新聞委員会が各教室へ配達



各学年・図書室の新聞スペース



【NIEコーナー】

- 作新学院に関わる記事を掲示する。
- 新聞についての理解が深まる題材の掲示と説明を掲示。
- 新聞に関するコンクール募集のお知らせ

【各教室】

- 教室、廊下に新聞ラックを置き、自由に使えるようにする。
- 児童の作品の掲示場所として活用する。



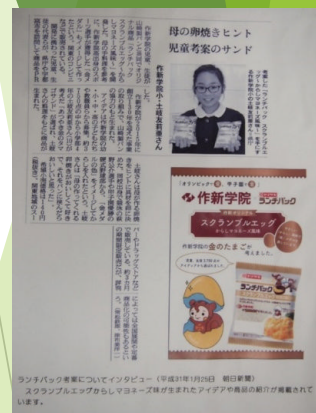
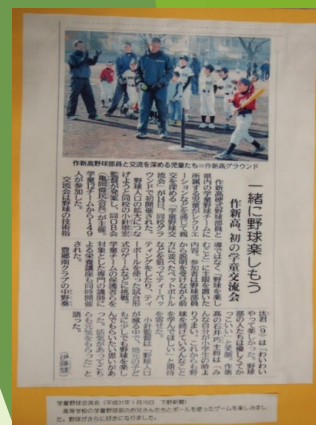
日常の活動に位置づけ、新聞を身近なものに

N I Eの取り組み ①NIEコーナー

【記事の掲示例】

- ・「復興ミカン」お礼に（平成30年10月3日 下野新聞）
西日本豪雨の復興支援でできた交流。
- ・母の卵焼きヒント 児童考案のサンド（平成31年1月25日 朝日新聞）
学院と共同開発したランチパックを紹介。
- ・一緒に野球楽しもう（平成31年1月15日 下野新聞）
高等学校の硬式野球部との交流。
- ・作新8連覇（平成30年7月22日 下野新聞）
高等学校硬式野球部の記事。号外の説明とともに掲示。

・自分たちと関わりのある記事を掲示し、学校の活動とつなげることで児童の興味を喚起する。



N I Eの取り組み ②作新学院祭へ出品

H30.9月



【作品テーマ】

- 「宇都宮市をもっと知ろう」
市の記事あつめ（3年）
- 「わたしたちのくらしと水」
壁新聞づくり（4年）
- 「世の中をもっと知ろう」
新聞スクラップ作り（5年）
- 紙上ディベート（6年）
- 新元号を考えよう（6年）

・ 社会科・国語・総合的な学習
の時間の中にNIE活動を位置づけ、
作品作りを進める。



- ・ 発信への意識を高める。
- ・ 来場者からの評価、感想を得る。

N I Eの取り組み ③年間計画への位置づけ

【特別活動】

- ・朝の会の題材として活用（1～4年）
- ・新聞委員会の活動（放送で記事の紹介・委員会集会の発表）

【各教科】

- ・記事集め，壁新聞作り（3・4年）→新聞スクラップ作り（5・6年）
- ・新聞社への投書，ディベート（6年）
- ・学習資料としての活用
- ・主に社会科，国語，総合的な学習の時間に実践。



本校のICT環境

【小学部】 児童用iPad（Wi-Fiモデル）

- ・ 15台
- ・ 下野新聞電子版アプリ
- ・ 調べる，撮る，提示する，共有する



【アカデミアラボ】 タブレットPC

- ・ 40台
- ・ 各設置校で共有



実践事例① 複数の新聞を活用した授業

◇ 5 年社会科「わたしたちの暮らしを支える情報」

	学習活動	指導上の留意点
1	・新聞社の見学（花の日訪問） 下野新聞本社，朝日・読売・毎日・ 産経の宇都宮支局を訪問。	・新聞ができるまでの行程で自分が知りたいこと，分からない ことをインタビューできるように準備する。 ・訪問時に見てくるポイントを整理し，見学に臨むようにする。
2 3	・訪問先の新聞社の情報を交換する。 ・新聞記事を見て気づいたことを発表 する。 ・新聞記事を比較し，共通すること や異なることを出し合う。 ・花の日訪問の記事は，どのような 思いで書かれているのかを考える。	・自分が訪問した新聞社での体験を合わせて考えることで，記 事になるとときには情報が編集されていることに気づかせたい。 ・比較にあたっては，見出し，本文の内容，写真の3点を比べ るようにする。 ・記事を読む人に何を分かってほしいのか，5紙に共通する点 を考えるが，難しい場合は自分の訪問先の新聞記事で考えても らうことにする。
4	・新聞ができるまでの過程，新聞作 りの工夫や努力についてまとめる。 ・これから自分がどのように新聞に 関わっていくかを考える。	・マスメディアの良さと問題点を意識した上で，新聞を上手に 活用していくための方法を考えさせたい。

（単元計画(13時間扱い)のうち，NIEに関わる部分を抜粋）

実践事例① 複数の新聞を活用した授業

花の日訪問の様子が記事になる



談話室

○…地域の人たちに日頃の感謝の気持ちを伝えようと、作新学院小学部の5年生14人が6日、下野新聞社を訪れ、社員に花束を手渡した＝写真。

○…同校は毎年、キリスト教の行事「花の日」にちなみ、6月第2日曜日前後に花を贈っている。67回目の今回は、約380人の児童が家庭から持ち寄ったアジサイやヒマワリなどを宇都宮市内の官公庁や企業約20カ所に届けた。

○…本社を訪れた児童たちは「社員は何人ですか」「発行部数は」などと社員にインタビュー。5年の沼野光希君（11）は「いろいろな人と触れ合える貴重な体験」と笑顔を咲かせていた。

下野新聞(令和元年6月7日)

※記事は下野新聞に許可を得て掲載しています。無断で記事を転載しないようお願いします。

新聞社を訪問した経験を踏まえて新聞記事を見る。



【新聞社の様子で気づいたこと】

- ・思ったより人が少ない。
 - ・新聞者の方からもいろいろ聞かれた。名前（漢字）や年も聞かれた。
- 記事を書くときには必ず取材をしている。

【新聞の内容から気づいたこと】

- ・自分が言ったことが載っている（いない）。
 - ・写真がカラー（白黒）。
 - ・大きく（小さく）扱ってくれている。
- 情報が編集されている。

記事に関わる当事者だから気づくこと

実践事例① 複数の新聞を活用した授業

他の新聞社の記事が気になる



下野新聞

【毎日新聞は他の新聞社の記事よりも】

- ・ 写真が大きい。
- ・ 全員が前を向いて映っている。
- ・ カラーで写っている。
- ・ 文量が多い。



毎日新聞（令和元年6月7日）

この記事がいちばんいいと判断

- （他の新聞社は）
- ・ なぜこの写真？
 - ・ なぜこの文？

実践事例① 複数の新聞を活用した授業

新聞記事の読み比べ

【共通していること】

- ・ どの新聞も花の日訪問の説明をしている。
- ・ 「5年生が新聞社に花を届けに来た」ことを書いている。

→記事は正確な事実を伝えている。

【異なっていること】

- ・ 写真が「集合写真」か「花を渡している場面」かで分かれている。
- ・ 見出しの書き方が新聞社によって違う。
- ・ 他の学年のことに触れている新聞もある。

→記事は情報を選択し、分かりやすく伝えるための工夫をしている。

記事を書く人の思い

- ・ 小学部の子どもたちが感謝の気持ちをこめて花を届けていることを伝えようとしている。

→全員が映っていない写真にも意味がある

→考えの変化

本社をおとすれた児童に感謝の
思いでインタビューのことは似ているので分
けその中でも一番いいのを選び記事
を作っている。

毎月がよかったか、やっぱりと気持ち
が違ったわ花をわたしている所の写真
がのっている新聞が「いいです」

実践事例② メディアとICTを活用した授業

◇ 5年社会科「わたしたちのくらしと環境」

	学習活動	指導上の留意点・資料
1	- 水俣病が起こった経緯を確認する。《NIE》《ICT》 - 学習問題づくり	- NHK for School→ 水俣病の経緯について知る。 - 朝日新聞→ 水俣病の実態, 今なお続く問題について知る。
2 3 4 5	- 水俣病によって起こった問題を調べる。《ICT》 - それぞれの立場から水俣病の解決のためにどんな行動をしたのか（しなかったのか）を考える。	- ドキュメンタリー番組の一部を見ながら考える - 患者の立場→ 裁判に立ち上がった人の思い - 住民の立場→ 差別感情 - 工場や国・県の立場→ 生産や排水を止められない理由など
6 7	水俣病の解決に向けて, だれがどんな取り組みをしたのかをまとめる。	導入で使った新聞記事は, 社会科で取り組んでいる新聞スクラップに使ってもいいことにする。社会科で学んだ内容が普段の取り組みにつながるようにしていきたい。

(単元計画(7時間扱い)より発表に関わる部分を抜粋)

- ・新聞以外と他のメディアによる資料を合わせて活用
- ・新聞資料→動画・写真資料

実践事例② メディアとICTを活用した授業

新聞記事（導入）

2016年(平成28年)5月1日 日曜日

水俣病 いまだ見えぬ先

公式確認から60年

「原点の患者」田中さん

5月1日、水俣病は公式確認から60年を迎える。熊本県水俣市の田中実子さん(62)は1956年、入院先の病院が「原因不明の病気」として保健所に届け出て、公式確認のきっかけになった患者の一人だ。発症から60年、そのほとんどを居間で過ごす。両親は亡くなり、姉夫婦による介護が続く。▼3面「日曜に思う」オビニオン面「社説」

3月。自宅を訪ねると、実子さんは居間の座布団1枚ほどのスペースでひざ立ちしていた。足を小刻みにずらしながら、一点を中心何回も回る。数十秒で1回転、何回も回る。そして突然、後ろ向きに倒れこんだ。そばで見守るヘルパーの女性がとっさに下に滑り込み、抱きかかえた。

原因物質のメチル水銀は中枢神経を壊す。実子さんがなせ回るのか、誰もわからない。話すことはできず、時折「んー」と小さな声を漏らす。

自宅は、原因企業チッソの工場からの廃水が流れ込んだ水俣湾の小きな入り江にある。1956年4月、5歳の姉が発症し、その10日後に2歳11カ月の実子さんが発症。「くつがはけない」との言葉を最後に、話せず、歩けなくなっ

た。姉妹は市内の病院に入院。院長が原因不明の病気の多発を水俣保健所に届け、5月1日が、公式確認とされている。姉は発病から3年足らずで亡くなった。87年に両親が相次ぎ亡くなった後、病状が悪化。何日も寝ない。全身を震わせ、床を転がる。夜は義兄の下田良雄さん(68)、屋は実姉の綾子さん(72)が看病。2012年から行政による障害者福祉の一端でヘルパーが派遣されている。綾子さんも水俣病の症状があり、行政から医療費を受ける。良雄さんは13年、患者と認定。夫婦に将来の不安は尽きない。「自分たちが先に逝ったとき、実子の面倒はとるさ。罰のあたる話だが、この子が先に逝つてくれれば」と綾子さんはつぶやく。良雄さんは言う。「原点の患者がこうして生きていくことを、知ってほしい」

(田中久絵)

動画・動画キャプチャ（導入）



NHK for Schoolの動画



動画キャプチャ(写真)

【新聞記事・ドキュメンタリー番組】

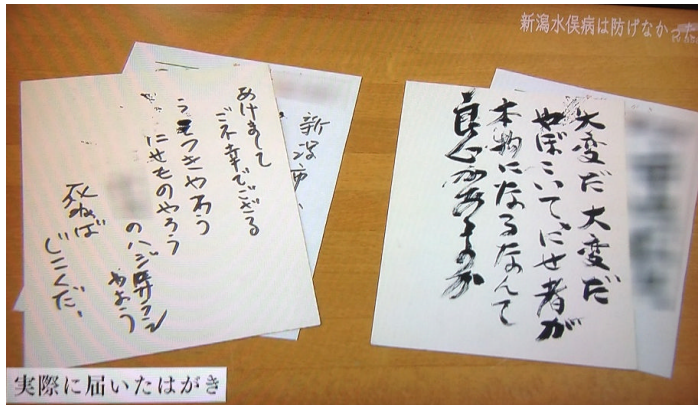
- ・今おこっているできごとを知る。
- ・記事を書いている人の思い(問題提起)が伝わる。

【動画クリップ】

- ・過去のできごとを知る。
- ・当時の経緯や様子が分かりやすく伝わる。

実践事例② メディアとICTを活用した授業

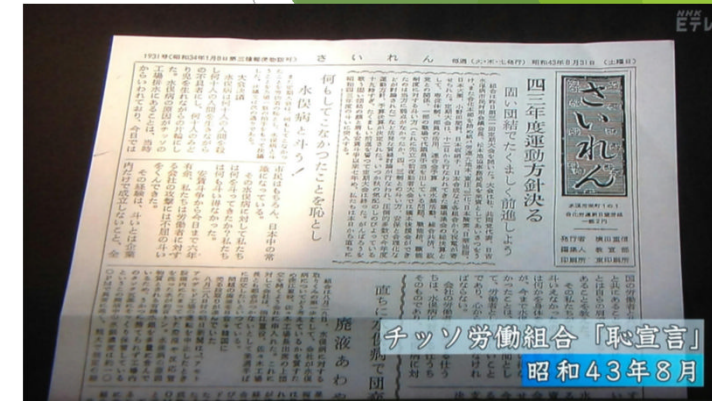
動画・動画キャプチャの活用



「病が見えない～新潟水俣病は防げなかったのか～」より



「水俣病 魂の声を聞く～公式確認から60年～」より



工場の立場から

住民の立場から

被害者の立場から

- ・ 違う切り取り方をしている番組からそれぞれの立場の考えを知る。
→ 物事を多角的に考えることができる

実践事例② メディアとICTを活用した授業

児童の感想

わたしは公害について学んで、
最初は、工場がはいくを止めないの
はひどいと思いました。でも、よく考
えると工場にも止められない理由
があったのかもしれないと思いました。
人々の日常生活などが、病気によっ
てうしなわれるのは、なあってはならない
ことなの。また同じようなことが
くりかえされないように、今の先も
かんきょうを保っていらしてほしい。
な。おせんさん、魚が食べられない
ように、焼きたくしやんをしたりして
公害をのりこえるために活動するのは、
すごいことだと思います。

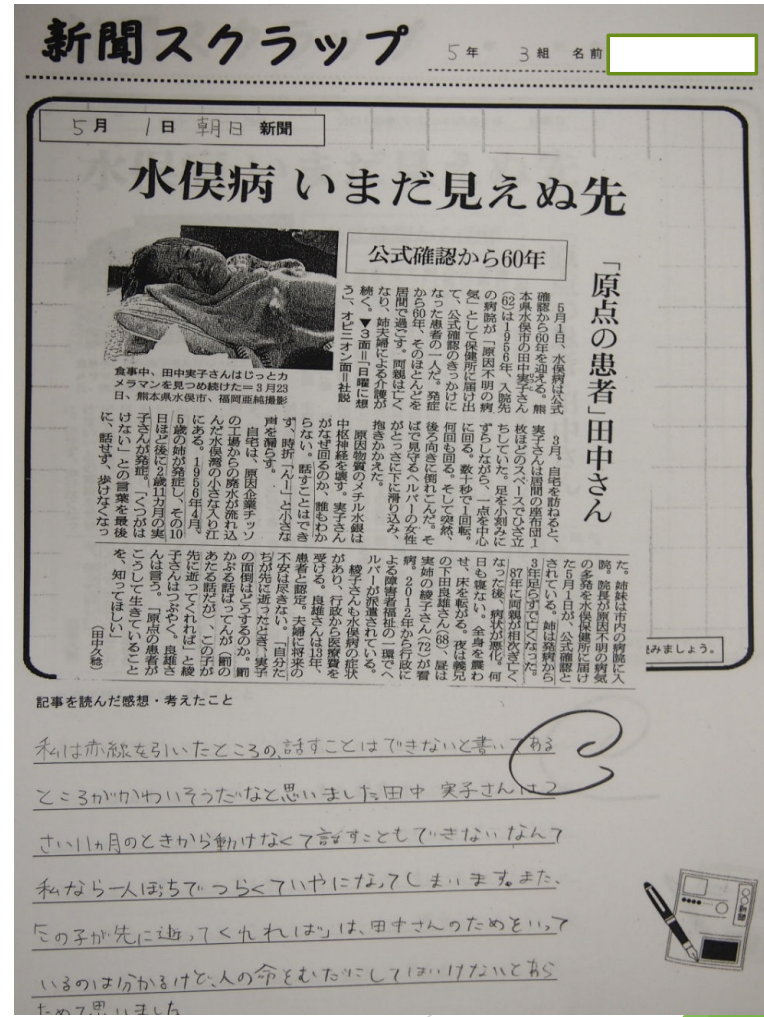
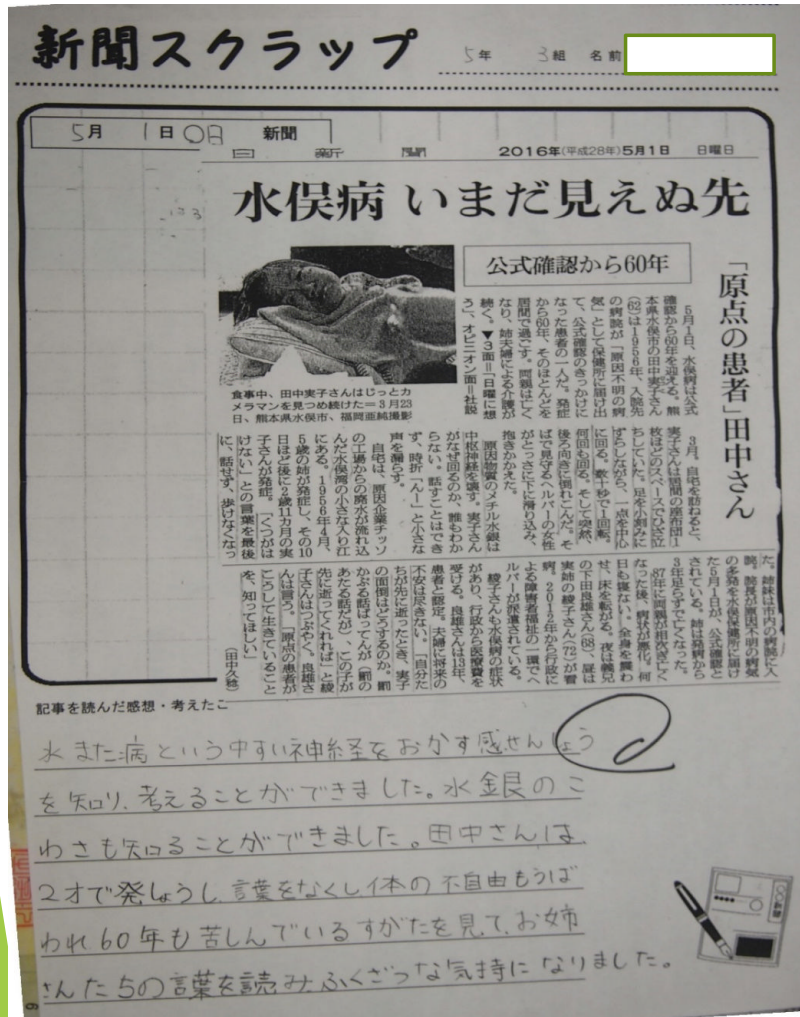
・それぞれの立場の考えを知り、水俣病をより多角的に考えることができるようになる。

・新聞記事、動画が大きなインパクトを与える。

→児童の考えを深めたり揺さぶったりするための有効な資料となる

実践事例② メディアとICTを活用した授業

新聞スクラップへ発展



実践事例③ ICTと新聞を活用した授業

◇ 5年社会科「これからの自動車生産」

学習活動	指導上の留意点
8 ・自動運転車の開発は、どのような願いのもとに行われているかを考える。	・動画クリップで実証実験の様子を紹介し、予想を立てるきっかけにする。 ・最後に新聞記事を配り、自動運転技術の開発は運転者の安全以外にも目的があることに気づかせたい。
9 ・日本の自動車工業が抱えている問題をもとに、これからの自動車工業はどうあるべきかを考える。	・新聞に関する記事は多いので、単元が終わった後も折に触れて新聞記事を紹介するように心がけたい。

(単元計画(9時間扱い)のうち、発表に関わる部分を抜粋)

- ・新聞以外と他のメディアによる資料を合わせて活用
- ・動画・写真資料 → 新聞資料

実践事例③ ICTと新聞を活用した授業

動画資料 (自動運転の実証実験)



【自動運転が実現すると良い点】

- ・ 運転が楽になる。
- ・ 交通事故が減る。

【実用化するための問題】

- ・ 本当に交通事故が減るのか信用できない。
(子どもでも運転できてしまう?)



- ・ 開発しているのは自動車会社ではない。
→なぜ? どのような目的で?

実践事例③ ICTと新聞を活用した授業

動画資料 (自動運転の実証実験)

この人 このテーマ

道の駅での自動運転実験の狙いは

中山間地 高齢者の足確保

国交省道路局企画専門官 馬渡 真吾さん(42)

——どんな実験だったのですか——

道の駅にしかた、周辺の一般道路を通行止めにして、9月の約1週間、自動運転車両で近隣の総合支所や集落を走行する実験をしました。走行延長が約2.5km、公算した地域約70人にモニターとして乗車してもらいました。無人で走行できますが、安全のため職員が同乗しました。

調べたのは、ヒト、モノ、道路の課題です。安全性、快適性や高齢者など新技術が受け入れられるのか。併当道の駅から支所まで届ける実験もする。物流も調査。道路に障害物があった場合など道路管理や走行の技術も調べました。

地域の協力で順調に——その結果は——

地域の方のご協力で順調でした。モニターと地域住民の計約100人に行ったアンケートでは、高齢で運転が出来なくなったという技術が役立つと、総じて期待の声が多かったですね。同時に、初めての技術で本音に出るものかとの受け止めもありました。年度内にまとめたいです。

なぜ道の駅ですか

ドライバーの休憩所、交通情報の入手場所などとして全国に117カ所。実はその約8割が中山間地にあり、近年は周回に病院、役所などの

に、初めての技術で本音に出るものかとの受け止めもありました。年度内にまとめたいです。

なぜ道の駅ですか

ドライバーの休憩所、交通情報の入手場所などとして全国に117カ所。実はその約8割が中山間地にあり、近年は周回に病院、役所などの

まわたり・しんご 1975年生まれ。日本大学で交通土木工学を学び、旧建設省(現国土交通省)に入省。道路局企画課長補佐、茨城県つくば市の国土技術政策総合研究所から米国に派遣され情報技術(IT)を道路交通に活用する共同研究。京都国道事務所長を経て、今年7月から車と道路をITで結び渋滞や事故を減らす道路局高度道路交通システム(ITS)推進室の企画専門官。

2020年の実用化を目指す

——実用化への行路表は——

2020年の実用化を目指す。来夏までに結果の間取りまめをし、ビジネスモデルを作るための課題を整理します。自動運転で単に既存のバスなどを代替し、多額の税金を使い続けるのでは意味がありません。

自治体を中心にバス事業者、宅配業者などがビジネスとして参入。地域の取り組みと連携して収益性を確保し、自立的で持続可能な仕組みを作る必要があります。

——めとは——

自動運転は、車両の技術革新が著しく、グローバルなプラットフォームなどIT企業も参入しています。都市部ではなく、道の駅周辺は限定された空間ならは環境が整いやすい。自動運転によって、高齢者が買い物や病院に通い、道の駅から高速バスで東京の線に会いに行ける。そんな仕組みを作りたいですね。聞き手 井嶋地

【自動運転車開発の目的】

- ・「中山間地の高齢者の足確保」のため
- 山間地の過疎化
- 高齢化する社会

→社会の問題を解決するために、自動車会社以外の人たちも開発に参加していることが分かる。



- ・一つの資料だけでは分からない。
- ・文字資料を合わせることでよりじっくりと考えることができる。

→メディアの特性を生かした資料の活用

まとめ

1. 複数のメディアを使うことによって
 - ・ 多角的な視点を持つことができる。
 - ・ 複数の情報から自分の考えを深めることができる。
2. ICTを活用することによって
 - ・ 過去のできごとなども実感をもってとらえることができる。
 - ・ 教材の収集と管理がしやすくなる

ご静聴ありがとうございました